

野の夜

由利原 直子

夜に、野に出でたり。

野、いづこにもあり、都會のただ中にも。

野は、自由の空なり。

野にありては、すべて溶けて崩れ、一つのアナアキズムうたはるるがゆゑに。
ヴィオロンは、かしましき枷かぎより解き放たれて、故郷の烈しき嘆きを隠さず。

草は茫茫として、そこかしこに亡靈あり。

生前の涙未だ涸れず愁ひに泥む靈、もとの志より逸れて、言葉さへ捨てて美し。
手を伸ぶれば、手のひらに瑠璃黄金の髑髏どくろ一つ宿れり。

我が前の世のものなりき。

ぼうぼう光りて、彼は笑ひかけたるがごとし。

君の往時は渺茫べうぼうとして彼方に去りたるか？と問ひてありや。

道の邊にはアパルトマン立ち並びたり。

深更なれども、色とりどりなる帳の奥に灯なほ瞬きて。

眠りからやらはえて憂ふる人の、なんぞかくは多き。

髑髏は我を急せぎければ、はや野の果てに着きにけり。

さはさとして乾きたる音、しきりに揺れぬ。

やよ髑髏に緑柱石輝エメラルドく！いにしへの智の銳とき光。

行く光、緑の箭やに異ならず。

箭落ちたる先に、グランドピアノ三つあり。

倨傲きよかうの影を夜の地に曳きて、漆黒なり。

あきらけく開きたる蓋に、我はおぼつかなく寄りぬ。

ピアノ喜ぶ作法を、我こまやかに守りたり。

叩けば怒る、さればふはりと帽子を載するにも似て、

しかうして斷乎たる意を鍵盤に語れば、

ピアノ遊戯すること限りなし。

響きは澄みて、降る星なり。

しかれども我がつたなき手、ただ白むばかり。

いと急なるピアノ、我が手捉ふ。

不思議なる樂譜手に宿り、次に鳴る音を知らぬまま、我とピアノはうたひたり。

音は熱と光もて、野に遍く満つ。

「我らこそモデルニテの申し子なれ。一にて全を備へたり。ムジカ・フマアナ（人の音楽）
奏かなで來し、我らの弦の強きこそ、心も詞ことばも及ばれね。」

さ言ひも果てず、ピアノどもなかぞらに驅ける。

優雅なる脚は、あがきて黒き空を踏む。

我、新參の星なれば、瞬きつつ星々へ挨拶たてまつる。
忽然として、泉の一つあり。

青き水と見えしかど、蒼玉サファイアを滿々と湛へたり。

ピアノはみな、永々と蒼玉飲みぬ。

しかうしてすべてを忘れ果て、さらには我をも忘れ果て、
疾とう疾とう歸り行きにけり。

空にて我はただ一人、ひねもす泣き濡れたり。

いつしか空の覆ひの去りて、二つの世あらはれぬ。

世は三角と圓の間を往還して、ことにかたちの定まらず。

一つには獸や蝶々ひしめき合ひ、

また一つには、すぐなる梯はし、恣ほしに伸び上がれり。

梯に椅子あまた備はりて、さはやかなる景けい、現げんじたり。

この梯、美しけれど、氷のごとくなる利劍もて成る。

獸を呼べば、ふとかへりみて人戀しげに寄り來たる。

分きて蛇は、懐かし氣なり。

しかれども、觸るるはしより飛天になりぬれば、敢へなくて。

獸、エエテルの外に出づれば悶ゆ。

思案の果てに、我は觸體あまたを數多出だしぬ。

觸體を繋げて夢の浮き橋つくり、やうやう歸りぬ。

觸體ども、始終囀りゐたりけり。

(令和元年六月二十一日受附)